

図書館協議会 答申の骨子(案) 2014.01.28案

論点	答申内容(これまでの委員意見をふまえて構成)
1. はじめに	
諮問の主旨 行革における目標	「『新・豊中市行財政改革大綱』取り組み総括」
今後10年で豊中市立図書館が目指す方向性	豊中市立図書館の中長期計画(グランドデザイン)の骨子
施設配置見直しの意味	<ul style="list-style-type: none"> ・施設配置を考えることは豊中市における図書館の全域サービスをどのように展開し、それを通してどのように豊中市の図書館機能を充実していくかということを意味する。これは統廃合の対象となる個々の施設だけではなく、対象外の施設を含めて豊中市立図書館全体の機能を再構築することを意味する。 ・豊中市立図書館全体をトータルにどう捉えるか。全域サービスという中でそれぞれの役割を捉えることと、それぞれの地域の中で個々の図書館がどういったことを期待されているか。それに対し現状の中でどういった課題があるか。 ・「豊中市立図書館の中長期計画」をどう実現していくか、そのなかでそれぞれの施設をどのように活用していくか。 ・様々な施設や団体・市民の活動と図書館が地域の中でつながって機能するには、どのような施設配置が望ましいか。
基本的な考え方 何をもち「適正」とするか 「学びのまちづくり」を担う 図書館はどういう場所か	<ul style="list-style-type: none"> ・「なぜ学校で学ぶのか・・・いろいろな考え方を持っている人達の中で、自分の考え方をもう一回見直して作っていくところに価値・意味がある」⇒図書館にも、本や新聞雑誌を読み借り調べに来る、知識を求めに来る人達が集まってくる、そこに人が集まってくる「場」としての価値・意味がある。 人が集まってくる「場」としての図書館のあり方。 ・「場としての図書館」・・・建物に本を置いて、そこに人が来れば図書館ということではない。作りたいのがどんな「場」なのか、その「場」を作るために何が必要なのかをはっきりとさせておく必要がある。 資料・情報や知識を求め、読み借り調べに来る人たちが集う。知的な交流が生まれる。地域文化の創造につながる。地域の人々のつながりや連携・協働。持ち寄り、分け合い、創る。ナビゲート役の司書がいて、膨大な資料・情報への扉が用意されている。 ・「学びのまちづくり」・・・もちろん子どもの頃から読むことや調べることに慣れ親しむことは大切であるが、子どものころに培った力が将来も継続して発揮できるような環境づくりがなければ、「循環」は生まれない。 図書館が人にとって”生涯の友”であるような町であってほしい。
2. 豊中市立図書館の全域サービスのあり方	
全域に共通する基本部分と、各地域に対応すべき部分の関係	<ul style="list-style-type: none"> ・2階建てのようなイメージで考えると理解しやすいのではないかと。1階部分は各館共通の基本的なサービス。2階部分でそれぞれの地域に応じた連携サービス・利用者の特性に応じたサービスを提供していく。 ・1Fの部分をごまできちんとやれるかという事がなければ、2Fは作れない。2Fを作っていくということは、1Fがきちんとしているという前提でなければいけない。 ・いかに共通の部分を豊中全体としてしっかり作るか。共通の部分を抜かしてしまうと図書館ではなくなってしまう。 ・デジタル化が進んでいる一方で、そこに本があることが、「そこで知識に出会える」ことを実感させる。知識を求めて図書館にやって来る・・・そこに「本」という形で、知識が目に見える形で存在しているということ。図書館に人が惹きつけられる一つの大きな要素だろう。知的な好奇心が図書館に行く事によって刺激される。そういうことによって図書館というものが人を元気づけられる場所になっているのではないかと。共通の部分としては、そこをいかに大事にしていくか。
全域サービスの観点からの課題1. 図書館から遠い地域の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・図書館から遠い地域が2か所・・・利倉西(猪名川沿い尼崎に隣接)と寺内(緑地公園駅近く) 図書館から遠く利用しにくい地域には、広域連携などの方法で対応を検討すべきだ。

<p>全域サービスの観点からの課題2. 地域内連携と広域連携</p>	<p>・人々の行動半径は広く、行政の区割と市民の生活範囲・暮らしとの間にはずれがある。豊中においても、すでに吹田・豊能三市二町広域利用を実施している。 今後も広域行政の中で展開を模索すべき方向や事業部分があるのではないかと。 ・新設する場合には、複数の自治体にとって非常に交通の便がいいところがあれば、共通の施設を作るなどということも、発想としてはあっても良い。</p>
<p>全域サービスの観点からの課題3. 全域のニーズに応えるための工夫</p>	<p>・それぞれの地域でよく利用されている時間帯は把握しているか。地域による違いはないか。例えば夜遅くまでにぎやかな町もあれば、朝が早い町もある。普通9時から17時に収まる枠組みで人は生活していない。大学などで深夜に開館したら学生が一杯来るという事例もある。 各館の特徴を出すという観点で、図書館ごとに地域を歩いてニーズを分析し、例えば深夜にあいている日とか、早朝5時から開いている日とか、そういうことも含めて全域をカバーする、全域のニーズに応えるということも考える必要はないか。</p>
<p>3. 利用状況から 以下の項目それぞれの視点から施設配置について言及する * 現状 * 今後の方向性(あり方) * それを実現するにあたっての課題 * 課題を解決するうえでの検討事項や留意事項 * それらを踏まえての課題を解決するための方策</p>	
<p>利用の現状から</p>	<p>・貸出返却以外の利用者を含む来館者数：地域館が約1.5倍 分館が約1.7倍 ・利用統計から読み取ると、18歳から20歳代の青年期の世代の利用が少ない。情報環境の変化による影響もあるのではないかと。 大学生にも図書館の使い方を教えなければならない時代 知ったら使う 司書という存在の理解 ・様々な世代の市民が、娯楽も含めて、何等かの問題意識・目的があって図書館を利用する。それに答えることが図書館の基本的な使命であり、目的に合致した資料・情報を提供することが必要。 ・資料費が削減された状態が続いており、資料の充実のためには資料費復元が必要。 ・貸出冊数の多さに比べて登録者が少ないことから、利用に広がりをもたせたい。若年層とシニア・リタイア世代が利用しやすいように、行動範囲・ニーズに基づいたアプローチ・利用状況に合致する施設配置を。 ・少年期、青年期、壮年期、老年期のそれぞれの時期に課題を抱えながら暮らしている。地域住民が図書館に集まり、図書館の本を利用して、グループでテーマに沿って本を読み議論する。図書館は適切な本と部屋を供給する。これは、図書館の1F,2Fの機能を兼ね備えている。⇨ライフステージの各段階の学びを支える ・地域にさまざまな議論・交流が花開くよう、学び、分け合い、交流し、創造する場に。(従来からある読書会・「千里コラボ大学校」や「大人のための絵本カフェ」等々を含め)そのような活動やグループ討議などのしやすい空間 シェアや創造がしやすい空間を。(例：暮らしの中の不安・心配を軽減するために、地域の歴史を知りより良い未来を創造するために、自然・環境を学び、守り育てるために 等)</p>
<p>地域住民の属性分析とニーズの把握 生活課題の掘り起し</p>	<p>・ベースになる仕事は共通だが、地域のそれぞれの特色にどう応えていくか。地域に積極的にかける図書館にしていこうとすれば、まずその地域ごとにどういったサービスを重点として展開していくかということ、当然考えていかななくてはならない。 ・地域ごとの属性の違いやニーズをどこまで把握することができるか。どこまで図書館の職員が実際の地域に出かけて行って、そうしたニーズを把握していくかということが重要になる。 ・地域住民の属性分析とニーズの把握⇒生活課題の掘り起し ・各館の利用状況と各地域の人口構成等との関連性を明確に示すことは？⇒複数館利用も多く、館ごとのサービス圏を明確に切り分けしにくいと、地域の人口構成等との関連性について示すのは難しい。</p>

<p>4. 地域・市民との協働の視点から</p> <p>* 現状 * 今後の方向性(あり方) * それを実現するにあたっての課題</p> <p>* 課題を解決するうえでの検討事項や留意事項 * それらを踏まえての課題を解決するための方策</p>	
<p>豊中市民の図書館への関わり 成り立ち～現在～これから</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・各地域の住民の要望・運動。サービスの検討、事業の企画・実施、評価。 ・豊中子ども文庫連絡会をはじめとする市民活動団体や、市民との協働が豊中市立図書館の特色になっていること。この独自性をさらに展開できるような施設の配置、整備が必要。 ・図書館職員が常に地域に向かう意識をもつこと。 ・すでに図書館市内各地で取り組まれている市民の様々な活動に、図書館が一員として、地域のつながりを深めることや発信することに関わっていくべきである。 ・多様で市内にばらばらに存在する情報を、各館が協力して一元化する試みは、図書館ならではの営みではないか。
<p>5. 公共図書館と学校図書館の連携の視点から</p> <p>* 現状 * 今後の方向性(あり方) * それを実現するにあたっての課題</p> <p>* 課題を解決するうえでの検討事項や留意事項 * それらを踏まえての課題を解決するための方策</p>	
<p>「とよなかブックプラネット」事業</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・豊中における学校図書館・司書の存在と、それを支援する「とよなかブックプラネット事業」と公共図書館。 現在は公共図書館と学校図書館とのさらなる連携をすすめるための施策として、「読書活動日本一」を掲げて「とよなかブックプラネット事業」を展開中。 ・学齢期に図書館の活用を身につけることが、生涯の学びの基礎になる。 子ども達が大人になり、自主的に学び続ける市民として図書館に戻ってくる時に、彼ら・彼女らの期待に応えるサービスができていくかどうか問われる。
<p>継続発展のための環境整備</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学校図書館支援センターの機能を十分に発揮できる施設配置と、学校図書館支援のための人材配置。 ・公共図書館の機能と学校図書館の機能には、大きな違いがあり、代替できるものではない。
<p>6. 施設の複合化・多機能化、施設に期待される役割の視点から ……資料③を参照</p> <p>* 現状 * 今後の方向性(あり方) * それを実現するにあたっての課題</p> <p>* 課題を解決するうえでの検討事項や留意事項 * それらを踏まえての課題を解決するための方策</p>	
<p>現状</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・地域館4館(岡町・庄内・千里・野畑)と、それぞれの分館4館(服部・高川・東豊中・蛍池)、分室1館(庄内幸町)、2図書室(いぶき・豊島西バス)、BM1台(動く図書館とよ1ぶっくる)で構成。 ・現在の9館体制は、従来の配置計画であった12館構想から、財政状況や人口動態等の変化に対応して、地域館・分館の利用圏域や各館機能・開架冊数等を見直した結果、ほぼ現在の利用ニーズに応えられる状況になっている。広域連携による補完を含めて。 ・4地域館が中央館的機能を分担。図書館のネットワークを機能させるには、必ずしも大規模な中央図書館は必要ではない。機能分担することで可能。 ・各館へのアクセスは、複合施設・単独施設ともに、徒歩・自転車・バス・電車による利用を推奨。大きな駐車場をそなえる館はない。

<p>館別 施設面での課題と特徴</p>	<p>地域館 岡町:(設置年はS20)S44~48現在の建物 H3~4大改修 H24子ども室部分耐震工事)蔵書26万冊 全体的に老朽化 雨漏り等 世界の子どもの本の部屋・医療健康情報コーナー・就業支援コーナー・読書会・障害者サービス・ 館外サービスの拠点(団体貸出/動く図書館)郷土資料行政資料・地域資料デジタル化事業「北摂アーカイブス」 庄内:S50老人福祉センターと公民館との複合施設 H4~5 改装工事 老朽化 南部地域の施設見直し計画が進行中(図書館が含まれるかどうかは未定) 下町情緒 安心して暮らせるまちづくり 多文化コーナー 市民協働事業「しょうないREK」 古本販売・コミュニティスペース 千里:(設置年はS53) H20建て替えリニューアル 千里コラボ:出張所・保健センター・公民館・老人福祉センターとの複合施設 ターミナル・商業地域 ビジネス就業支援コーナー・ヤングアダルトサービス 便利な立地で利用が多く滞在型利用には不向き 吹田市との広域利用対象館 野畑:S63周辺地域に公共施設が少なく、コミュニティの場として集会室を提供 雨漏り等 住宅街 共同書庫 蔵書約30万冊</p> <p>分館 服部: H11 デイサービスとの複合施設 吹田市との広域利用対象館 蔵書6万5,000冊日常生活に役立つ実用書・読み物・雑誌が中心 近隣に病院施設 これらの施設と協働で事業を展開していきたい 高川: H12 スポーツルーム・老人憩いの家・デイサービスセンターとの複合施設 「ぶらりあん」で懐かしい映画上映(高齢者のくつろぎ) 吹田市との広域利用対象館 東豊中: H5 幼稚園との複合施設 吹田市との広域利用対象館 蛸池: H15 蛸池駅前再開発ビルルシオーレ内5階</p> <p>分室 庄内幸町:H5 庄内に近い小型館 阪神淡路大震災後周辺人口減 蔵書2万5000冊 H23に一部機能変更2F「学校図書館支援ライブラリー」(教員支援資料・調べ学習パック)</p>
	<p>各館利用者のアクセス方法について:徒歩・自転車・自動車・バス・電車 駐車場の有無/複合施設と単独施設の違い 豊中市は、学校・病院・商業施設などが分散しており、交通網も入り組んでいる。 他市のような大規模中央図書館を造って、業務を集中させることは考えにくい。</p>
<p>館別ビジョン</p>	<p>岡町・・・行政職員・ボランティアの利用拡大。医療施設・府立高校との連携拡大。 高齢化に伴い遠出ができない利用者に向けて機動力を生かした宅配・動く図書館の巡回 服部・・・乳幼児・保護者の利用。あらゆる世代が気軽に立ち寄れる地域に密着した図書館。 庄内・・・児童の居場所機能。外国人利用者の拡大。リタイア世代の利用の拡大を目指す。 高川・・・地域住民に親しまれる図書館として、映画会等の行事を通し利用者拡大を目指す。 庄内幸町・・・地域密着型図書館(ミニホールの稼働率アップ)。少ない蔵書の回転率アップ。 学校図書館支援ライブラリーの利用拡大を目指す。 千里・・・地域の活性化に役立つ図書館を目指す。YA世代(中高生世代12~18歳)の利用の拡大。 ビジネス就業支援サービスの浸透。 東豊中・・・滞在型利用が多いシルバー世代にとって新たな発見・生きがいにつながる図書館。 新しいマンション増加で乳幼児と保護者の利用増加定着。子育て・子育て支援の面で 利用しやすい図書館。 野畑・・・地域の人の集う場、心地よい居場所づくり。シニア世代の地域活動への参画支援。 YA世代へのサービスの充実をはかる。世代間交流の場を目指す。 蛸池・・・乳幼児と保護者の利用が定着しつつある。大学生の利用拡大を目指す。</p>

<p>先行事例としての千里における施設の複合化・多機能化 千里コラボ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・千里地域特有の条件下で実現した事例なので、他の地域にそのままあてはめることはできないが、施設再編の良い事例となっている。 ・PRに関する課題と市民および市民活動団体との協働は、豊中の図書館を今後どう展開していくかを考える時欠かせない視点ではないか。館内に閉じこもらず外に向かう意識があるのと同じことでは同じことをしていても印象が変わるはず。また職員のみではなく、いかに市民の力を巻き込むかと言う前向きな考え方をすべきでは。千里コラボの成立も、「豊中図書館の未来を考える会」が、既に設計段階からの市民参加を求めて、千里文化センターの図書館の市民公益活動推進条例に基づく協働提案事業に提案(結果的には不成立でしたが)したことがきっかけとなって、設計が見直され、千里の市民も加わり市民創造会議が発足し現在のコラボ構想が進展したことを忘れないようにして欲しい。現在南部コラボ構想が進展するに際しても市民参加は欠かせない。 ・地域・市民との協働
<p>仮称南部コラボ構想について</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・南部コラボ構想 南部地域の魅力・特性を活かしながら活性化するために・・・下町の風情とにぎわい・ものづくりのまち・大阪音楽大学・次世代を担う子どもたちを地域全体で育む・みんなが集って学んで助け合う・ワンストップサービス・住民一人一人のいきいきと充実した生活の実現・学校教育環境の再編・市民活動コーディネート機能・「住民の出会い、楽しみ、繋がり、ひろがりの拠点」・地域全体の公共施設の再編。拠点機能とサテライト機能。 ・コラボ・・・ 有機的に機能させる。コラボに来た人に、様々な交流や集いのあることが伝わるようなあり方を。たとえば書架の資料群・PC・講義スペース・発表の場の舞台など、有機的に機能できる空間を。 ・庄内図書館と庄内幸町図書館の配置見直し・再編が考えられる可能性がある。メリット・デメリットの確認。 ・南部コラボに地域の知の拠点として図書館が位置づけられることで、南部のまちづくりに図書館を活かすことができるのではないか。
<p>今後の公共施設に期待される役割</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・すでに各館別の特色ある取り組みを開始しているが、・・・社会福祉協議会など、独居の高齢者等のニーズの把握等、組むべき相手がまだ地域にはたくさんあるのではないか。公民分館の文化部などとの関係で何か連携できる地域もあるのではないか。 ・豊中では複合の強みを活かすことが、様々な施設との連携を作っていく上でも強みになる可能性がある。その強みをどう活かしていくかが施設全体を考えていく上で大きなポイントになってくる。 ・緊急時・自然災害の際の、利用者の安全確保・地域の避難施設としての安全性から、老朽化は問題である。コミュニティの安心・安全を保障していく役割をもつ公共施設としての配置・あり方。 ・資料保存の機能については、検討が必要だ。 ・その土地にしかない貴重な資料を守り保存する使命。被災地でのさまざまな事例・・・水の中から回収して、復刻に取り組むなど。買える本ならばまた購入することもできるが、そこにしかない貴重な資料がある。様々な災害から貴重な資料を守るという使命。 ・人との関わりにおいて不安を抱える人々の存在。子育て・気軽な相談先・社会参加・不安解消・課題の解決・人との関わり・本の匂い・雰囲気・生活の一部に図書館が当たり前にあるようなところとして存在してほしい。 ・連携・交流をゆるやかに伝える仕組み・一つの施設の中の書架配置や設備の作り方の面でも、連携がゆるやかに広がるような仕組みとして、そこに集まる人々が一緒になって何かの活動をするような場を、それに参加をしていない人からも垣間見えるような形、閉鎖的な部屋の中でやっているということではなくて、いろいろな会議や集まりの様子が、「あんなところであんな事をやっている」と伝わり見えるような形にしていくこともいいのではないか。

<p>7. 事業の効率的展開の視点から</p> <ul style="list-style-type: none"> * 現状 * 今後の方向性(あり方) * それを実現するにあたっての課題 * 課題を解決するうえでの検討事項や留意事項 * それらを踏まえての課題を解決するための方策 	
<p>効率的に質の高いサービスを行うために 目標の数値・指標について</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・コストの問題もクオリティで考える必要がある。 コストを語る場合には、同じクオリティのサービス同士で比較をすべきだ。 ・ボリュームが減ったからといってクオリティを落としては、利用者は納得しない。 ・図書館に関しては、最低これだけはしなければいけないというような法律の規定があるので、非常に地域的な差が大きい。このため全国平均という考え方を図書館の数値にあてはめる場合にはかなり慎重でなければいけない。
<p>自治体の責任</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・理念・目的の具体的実現に際し、コストの問題から取捨選択をどのように行うか。豊中市の方針として一つの考え方が出ているわけなので、結果としてきちんと豊中の図書館として責任を持った仕事をしていけるものにしていく必要がある。 ・基本的な責任の問題として、豊中の図書館の資料提供という責任は、豊中市がきちんと背負っていかなければいけない。実際に市民の方々が利用されている実態にあわせて、他の自治体との連携をどう作っていくか、その中で配置計画も現実的な形で考えていった方がいいのと思う。 ・行政全体が図書館をどう活かして町を活性化させるのに役立てるかという、そういうビジョンがもっと示されて良いのではないか。
<p>8. 図書館の働きをいかに伝えるか</p>	
	<ul style="list-style-type: none"> ・図書館は建物一つで完結するものではない。地域の人々や活動とつながる機能・役割を備えた施設である。⇔今繰り広げられている市民の様々な活動が図書館を通じより広く伝わるように。 その効果を最大化できる施設配置を。 ・地域→エリア→豊中市内→豊能・北摂→大阪→近畿→全国・・・ 地域のつながりが図書館ネットワークでひろがっていく。 ・図書館が地域のつながりと共にあることを伝えることが不足している。 図書館は豊中市内の各地域で、人々のネットワークをつなげる機能を果たしているということを、分かりやすい言葉で、子ども達にも、議会や行政に対しても、図書館はこのように機能しているということを、分かりやすくきちんと伝えることを、日常的にもっとやっていかないとけない。 ・今までの経験を次にどう活かしていくか。今まで築いてきたものをもう一度点検し、それをどう活かすか。
<p>9. おわりに</p>	